

歴史紀行

10月号では、7世紀以降寺院が数多く造営されることに触れました。

この大規模寺院造営事業は、それまでの手工業生産体制にも変化をもたらしたと考えられています。例えば、百濟から新たに伝わった技術である瓦作りは須恵器工人(須恵器を専門に作っていた人々)が関わっており、すでに日本で定着している技術と新たに伝わった技術が交流していました。

船橋遺跡でも、7世紀以降手工業生産の痕跡が見られるようになります。

船橋遺跡のほぼ中央で現在の大和川の北側(河内橋の西北)で行った発掘調査では、飛鳥時代の建物群が見つかっています。ここでは、ガラス小玉の鑄型が複数出土しています。その他、鞆羽口(炉に付ける送風管の先端)、鉄滓(溶かした鉄のかす)、漆が入った壺などが出土しています。また、炉の下部構造の可能性が指摘される土坑も見つかっています。これらのことから鑑

みると、船橋遺跡の北側ではガラスや鉄、漆の工房が置かれていたのでしょうか。

奈良時代に入っても、ここで鑄造関連の生産が行われていたようです。このことから、船橋遺跡に河内鑄銭司が置かれたのではないかと推定する意見があることは注目されます。鑄銭司は、律令国家により錢貨鑄造の際に臨時におかれた役所のことです。和同開珎などの皇朝十二錢という奈良・平安時代の12種の錢貨を鑄造・改鑄するにあたり、近江・河内・山城・長門・周防などに設けられたようです。この一つである河内鑄銭司は、『続日本紀』和同二(709)年八月乙酉条に登場します。銀錢の発行をやめて銅錢のみを流通貨幣とすること、河内鑄銭司の俸禄や賞与、叙位は「寮」という官司に準じて行うことと記述されています。ここから、河内鑄銭司は発行後間もない和同開珎の鑄造に関わったと推定されています。

様々なモノづくりが行われた例には、奈良県明日香村の飛鳥池工房遺跡があります。ここでは、7世紀後半を中心とした時期に金属加工、ガラス、漆など様々なモノづくりが行われています。特に飛鳥池工房遺跡で注目されたのは、富本錢という銅錢が作られていたとわかったことです。様々なモノづくりが行われた飛鳥池工房遺跡の例や船橋遺跡から鑄上げたばかりの感触がある皇朝十二錢が出土していることを踏まえ(※)、船橋遺跡に河内鑄銭司が置かれた可能性が考えられています。

船橋遺跡の北側になぜ工房が置かれたのでしょうか。この一帯に数多く作られた寺院に供給するためなのか…王権が主導して設置したのか…そして船橋遺跡の北側は飛鳥池工房遺跡のようにさまざまなモノが作られた一大工房



▲手工業生産に関わる遺物 (公財)大阪府文化財センター提供

さまざまな歴史を刻んできた 船橋遺跡⑥ ～古代の船橋遺跡 とモノづくり～

エリアだったのか…大半が河床に眠った船橋遺跡には、こつしたたくさんの謎がまだまだ眠っているのでしょうか。

(文化財保護課 河合 咲耶)

(※)①溶かした金属を鑄型に流し込む②金属が固まったら鑄型を外す③はみ出した部分などの不要な部分を取り除いて磨く、というのが鑄造の大まかな工程作業です。「鑄上げたばかり」とは、②の工程で終わっている(③の工程まで行っていない)状態です。失敗品もしくは製作途中のものとは考え難いので、こつした状態のものが見つかるということは、そこで鑄造が行われていたと考えられます。